

E**君のJU

北河鱒之介

編注 佐藤斗史生

(聖杜大学探検部百年誌より転載)



北河鱒之介 (再録 佐藤斗史生)

本編について(佐藤)

本編はもともと探検を主題とした月刊誌に発表されたものが聖杜大学探検部の記念出版に再録されたものである。

編者が序に言及されている奇譚『いばらの森に姫は眠り』(散逸していて原本は残っておらず、一部にはその実在を疑う説も多かった)について調べていた時に偶然見つけたもので、『いばらの森』が題材をとったと想像されている聖杜大学東阿弗利加探検の実際の参加者の手記である点が大変興味深い。

空想科学小説の同人である本誌読者にとってもそれなりに興味深いものであるうし、今やまったく人口に膾炙かいしゃしなくなつたとはいえ、聖杜大学のこのアフリカ探検は、本邦探検史に残る謎であるだけに、ここに再録するのも意義あることと考えた次第である。

掲載された月刊誌はおるか聖杜大学さえ今はないことや本編中の東京の描写などを見ると、ここ半世紀の本邦の変貌ぶりには今更ながらに驚嘆を禁じ得ない。

掲載するにあたり、言葉遣いを現代語になおし、明らかな誤植と思われるものについては訂正した。また、現在ではわかりにくいと思われる事物等については本文中に()を付して説明を記した。末尾に作品解題と北河氏の年譜を掲載したので本編解読の一助になれば幸いである。

謝辞

この「聖杜大学探検部百年誌」に本稿の再掲載を快諾していただいた明和出版、資料の閲覧や掲載を許可していただいた聖杜大学及び北河記念館ならびに関係各位・各機関に衷心より感謝を捧げます。

序にかえて

E君は私の知る中で最も有能かつその資質に恵まれた記録者だった。

人は何かを為すとき、得てして後のことなど考えず、その場での効率、やがて手にする成功のみに目をやって突っ走ってしまうものだが、彼はどんな時にも冷静かつ沈着に状況を見定め、自らの足下をけして見失わず、その企画を完遂した後のために自らのそして周囲の状況や経過の実情を保存しておくことをまるで天性のもののようにひょうひょうとこなしていた。

また、先人の残した断片的な記録をとりまとめる慧眼と構成力、筆力を併せ持ったまれにみる才人であった。

世の冒険家や探険家はいうに及ばず、本邦の探険について少しでも興味を持つものは彼の名を眼にしないでその興味が満たされることはないであろう。特に、本邦各大学探険部の創設以来の探険略記をまとめた『本邦大学探険略記』はほとんど彼一人の手でまとめられたといつて良い。

この掌編は私が彼に最後に会ったときのことを往事の日記などを参照しつつ思い出しながら記したものである。思い違いや誤記も少なからずあると思うが、これで彼の人となりが少しでも伝えられたらこれに勝る喜びはない。

最後に、巷間伝わるるところによれば、本編でも触れた聖杜大学東阿弗利加探険について当時から様々な噂があつたが、ここにきて『棘の森に姫は眠り』という匿名出版が流布されたことにより、そうした噂が再び蒸し返されている由を漏れ聞いた。

ここにあらためて、あの探険は悲劇的な結末を迎えはしたもののけしてどこかの三文小説家が書いたような荒唐無稽な非常識なものではなかつたことを聖杜大学探検部の名譽のために付記しておく次第である。

それは大学が夏休みに入る直前、暦の上ではまだ梅雨の真つ最中のはずがまるでもう夏本番というように白濁した青空と夕立を予感させる入道雲が遠く相模灘の彼方にいく柱も聳えている、そんな日だった。

その年の探険計画の立案も終わり、下級生が準備に走り始めたところで、私自身は久しぶりに体が空いていたのだと思う。映画好きの友人に誘われて浅草の集合形式映画館で封切りの映画を朝一番から見に行つたその帰り、友人と別れて銀座の伊東屋で新しい文房具でもひやかしていこうと、百貨店の前に並ぶ宣伝板をぶらぶらと覗きながら歩いてきた時のことである。

当時は米国の各映画会社の新作が輸入されると、銀座四丁目の百貨店の角に高さ七尺を超えるような宣伝看板が立ち並ぶのがきまりで、これに便乗してか、百貨店の催事や博物館・美術館の特別展、近郊の遊園地での催しなども映画に倣つた宣伝板をにぎにぎしく飾りだしていたものである。

夏らしい白っぽい空を背景にして水平線に城塞のように並ぶ入道雲を背景に、朱色に塗られた東京塔に係留されている進空したばかりの新型蒸気駆動の大型旅客飛空艇が目映く輝いているのを高架を走る環状電車の窓から同乗の見知らぬ客たちと驚嘆しながら眺めたあと、人混みに流されるように銀座駅で降りた。(筆者の勘違い、または意図した誤り。新型の超大型旅客艇の初飛行は一九三三年)

週末の昼ということもあって、銀座通りは乗合や路面電車さえ先に進むのに苦労するほどの人出だったが、もう今期の宣伝板が出てから何度が週末をやり過ぎているせいで、今更私のようにしげしげと宣伝版を眺めてゆくものは少なく、かえって見やすいことであつた。活動写真という古めかしい呼び名のままにずらりと並ぶ街頭宣伝板を見終わり、映画以外の興行案内もあらかた見終わつたとき、端のあたりにあつた一枚、とある遊技園の広告板の前に立つ背中に妙に見覚えのある気がして思わず覗き込んだ。

それがE君だった。

一枚の宣伝大判の前で猫背気味の背をさらに前こごみにしてこわばつたように立ちつくし、あいかわらずの模造鼈甲の細縁丸眼鏡を心持ち下げ気味にして眉間にしわを寄せ、一心に目の前の極彩色の宣伝を見やつている。

「E君じゃないですか」

私の声に少しく驚いたらしくその肩が動いたが、ゆっくり振り向いた顔は探険部の部会で見せていたのとまったく同じ生真面目そうな落ち着いた表情ではあつたが、その視線は宙をさまようかのよう私の顔に焦点を結んではいけないようだった。

「これは北河さん、おひさしぶりです」

そう言つて軽く頭を下げた途端、すぐにはと我に返つたかのようその眼差しに焦点が戻つた。

私はその前年から、探険部の部長を仰せつかつていたのだが、彼は私が部長になる前年の年度末に探険部を辞めていた。探検記録の綴り方そのものの権化のような彼であつたから、その辞意を聞いた者たちは誰もまずは信じる事ができず、「世の探検学のために」とて惜しむ声が強く、私を含めてOBや教授たちが夜も日も明けずに思いとどまるように説得したのだがその決意は固く、その年の探険年報を完成させるともう部屋に立ち寄りつとはしなかつた。

とはいつても大学にはまだ籍を置いていて授業にも出ていたらしいことは仲間の噂で知つていたが、実際には今や「皇立民族学博物館 Royal Society for Ethnology」として見事に結実した組織の設立に奔走していたらしい。

そもそも彼は私よりいくらか年下だったのだが、成績優秀で高等部普通科を通常より二年早く卒業していたため、高等部で留年していた私よりも入学年次は早かつた。おまけに彼は入学してすぐに探険部に入ったのに対し、私は給仕の仕事しながらの勤労学生であつたから探険部に入ったのも入学した年の秋であつたから、探検部内では彼の方が先輩であつた。

探検部の顧問であつた勅使河原教授の薦めもあつて私が探検部に入ったときには、すでにE君は一年生であるにもかかわらず書記の

仕事をこなし、翌春に出版された『大学探検部略記』を纏めるために精力的な活動を行なっているところだった。私とすれば、何とも相手にしづらい人物だったのである。

そういうわけで私たちは最初のうちは探検部員ということで学内で顔を合わせれば挨拶はするといった程度の知り合いだったが、そこは探検部で、一度でも探検行をともしれば、年の差や学年などは気にしないようになるのである。

夏だというのにきつちりと洒落た紺色の背広に襟締ネクタイまで締めてい
る。暑さのせいも最近の流行りか、帽子は持っていないようだった
が、大きな片袖袋ショルダーバッグを重そうに肩から提げているせいで、せつかくの
背広が台無しだった。が、そういう私も半日以上遊興やこの銀座
のいざいざに脇の下は汗染みでぐっしょりだったからあまり人のこ
とはいえなかった。手巾ハンカチでつるりと顔の汗をぬぐってから、私はあ
らためて彼に向き直った。

あまりに無防備な表情を見られたことに気がついたのか、私の視線を避けるように急に宣伝の方に向き直ると顎をしゃくつて見せるのだが、振り向きざまに苦笑いが口元に見えたように思う。

「これなんです、どう思われますか？」

「どうって、ただの見せ物だろう」

私はあらためて目の前の宣伝に目をやった。

一見したところ、それはどう見ても遊園地や場末の盛り場の差し掛け小屋で日銭を稼いでいる低級な出し物でしかなかった。ざっと見て、私は何の気なしに思ったことをそのまま言った。

「この手の見せ物はよくあるじゃないか。時々新聞にも載ったりしている。かわいそうに先天性の皮膚異常か免疫不全で表皮が変成しているのじゃないか。もし気にするとすれば、すぐに医務局に報告すべきだろう」

「北河さん、でもこの絵をよく見てください。そんな崩れた感じじ

やないですよ。それに、ほらこの指先なんか」

私は、彼にそうはつきりいわれるまで、実際のところ広告にはまともを目をやっているわけがなかったのだ。なんとも、たとえ日中、大混雑の銀座並木ではあるうともけして眼を向けたくない

そして、そういうわれたにもかかわらず、私は何故かその宣伝大判を見るのは気が進まなかった。

何と指摘できる理由があるわけでもないのに、心の中のなにかがその絵に向き合うことを望んでいなかったのだ。

汗が、突然、冷たいものにかわり、周囲の騒音がふつとぎれたような刹那、眼の端にかかった宣伝版はまるで嵐の前兆にうねる海原の上を滑るかのようにふるえたように思えた。

立ちくらみにも似たその感覚は一瞬に過ぎ、また額にどつと熱い汗の感覚が戻った。

その大判宣伝は、よく見ると総天然色 最近では英語のままにカラーと呼ぶ風であるが の印刷もので、少しは広告に金をかけているようだった。

上段に虹色の帯に囲まれた飾り文字で「当世随一因果応報悲劇之証」とあり、その字に斜めに被さるようになり、おどろおどろしい鮮血色で「哀涙流生娘之変化」とあった。そして、最下段には神奈川県下のある遊園地の名と開催の期間が流麗な絵文字で書き留められていた。

そして、この宣伝紙の中央に問題の少女の像があった。

この宣伝の最も強調するところであるその少女の似姿は、極彩色の粹飾りの真ん中にこちらを向いて椅子に腰掛けていた。写真のようでもあるが、E君同様に顔を近づけてよく見ると、超絶技巧で描かれた絵だということがわかる。地の模様かと思まごうかのように細かくかつ流れるような化粧文字で書かれた説明が、周囲を埋め尽くしてたる。

その少女の像の真ん中、頭のとっぺんからまっすぐ縦に線が引か

れていて、むかつて左側、つまり右半身は華やかな桃色の貫頭衣ワンピイスを着ている。

一方、左半身、むかつて右側はまるで様子が違っている。

服は同じく桃色の飾り付きの半袖貫頭衣なのだが、微妙に彩度がおさえられ、暗くなっている。

そしてその服からのぞく手足と顔はほとんど墨絵のような無彩色である。

「だから、こんな絵では何もわからないよ」

「よく見てくださいよ、指が異様に長いでしょ、それにこの眼」

見たくないものを、それでも何とか判別できるだけは見ないことにはどうしようもなく、私はかの少女の似姿の暗い部分に注意を向けた。

薄桃色の血色の良い右手に添えられている左手は、絶妙な筆使いで灰色と黒でぼかして塗り分けられている。まるで名人の手になる水墨画のように濃淡だけで、奥行きも質感もすべてを表現していた。変形し瘤のような関節。対応する右手のか弱げな白魚のような指の倍以上はありそうな左手の指。指先は鋭利に伸び、先端は地の模様にとけ込むようにしておぼろである。

そして、その眼である。

対照的すぎる色彩の顔。ほんのりと紅をさすまつげの涼しげな左側の顔に比べ、その右側はひととき黒々と沈みこんでいるかのようだった。そして、墨痕鮮やかな濃淡のにじみの間にまん丸で真白な白目。そしてその真中にこれも真円の瞳孔がまるで闇を覗くかのようにならんと描かれている。

まつげの可愛いつぶらな瞳と、まるで死体から取り出した眼球そのものを貼り付けたような真円の眼。

「北河さん、どうです、この少女の顔に何か感じませんか」

声にはつと我に返った。いつの間にかこわばるほどに握りしめていた手の中の手巾で額の汗をぬぐう。

しかし、その暗闇から、漆黒の穴から目を離すことができなかつた。

おお、なんとということだ、この晴れやかな夏の日、我が帝都のそれも銀座の真ん真ん中で、あの洞窟の奥底でかいま見た怪異を目にする等ということがあつていいものか。

違う、断じてそんなはずはない。あの日、息の続く限り走り続けた、あの日。

「ま、まさか、それは考えすぎじゃあ」そういいながら、鼓動が早まるのを感じていた。

それが、私を見ている。そうだ、私を見て、唇のない象牙のような真つ白の歯をむき出しにした口元が、まるで微笑むように端が上がり、瞼のない眼が、私を見ている……

急に、周りの騒音が遠くなった。かわりにあの、熱帯の密林にこだまする蝉と吼え猿の木霊が……

「これで三人目だ」血まみれの苦力を見下ろしながら部長が苦しげに言う。

「見て！！ あそこに！！」

振り向いた先、篝火に照らされる熱帯特有の蔓植物と羊歯の葉の間に、眼があつた。真ん丸の眼が闇に浮かび上がって、こちらを凝視している。

「この野郎！」秋森大佐がライフルを構えて発砲した途端、眼は消えたものの我々の周囲一帯に草をかき分け梢をきしませる音が響きわたった。

「これで超自然的なものでないことだけははっきりしましたね」E君が言った。

「儂わしの言つたとおりじゃろ」

「いえ、まだわかりませんことよ。悪魔にだって眼はあるんですから」

私はそんな仲間の声を聞きながら、ついいままで眼が光っていた闇から視線を動かせないでいた。

ああ、あの眼！ すべてを見透かすような、あの……

突然、肩を掴んだ手が私を現実世界に連れ帰った。一気に銀座通りの喧噪が戻ってくる。

真剣なまなざしのE君が私の顔をのぞき込んでいる。

「どうです、北河さんも感じるでしょう？」 いつの間にかE君の額にも幾筋もの汗が流れている。

「僕はどうしても、あの……、見に行きます。北河さんも見に行かなくては」

穏やかな口調とは裏腹に、彼の表情が有無をいわせぬ力を持って私に迫っていた。

『あの洞窟に入って生きて再び戻った者なら、これをけして見過ごすことなどできるはずがない』 そう、彼のまなざしは語っていた。

「た、確かに。……しかし、まさか、そんなはずは」

「いやだな、北河さん。僕だって、けしてあれが今まさに我が日本国にいたなんて思っている訳じゃありませんよ。何かあるんでしょう、我々の知らないことが。」

ただ、このまま見過ごしにして何もせずには、それこそ疑心暗鬼に捕らわれて精神をむしばんでしまっただろうことは目に見えているんです」

生真面目にそう言う顔が、夏の明るい日差しの下でも心なしか青ざめていたように思う。

「よせよ、それほど気にすることじゃあ」私の言葉も確かにふるえていたように思う。

「北河さん、一緒にいていただけますね」

彼が単刀直入にこう切り出した。

「まさか、ほんとうに見に行くなんて……」

ポケット

胸衣裏から煙草を取り出す指先がすべて煙草を取り落とししてしまった。明るい口調で言ったつもりだったが、語尾がしどろもどろに消えていく。どうしても彼の目を見返すことはできなかった。

次に取り出した煙草に火をつけ、思いつき吸い込んでからようやく彼の顔を見ることができた。

「そりゃ、このままうっちゃっておけば、確かに寝覚めは悪いが…… どうしても行くかい？ よし、わかった、私も行くことにするよ。君も知ってるように、今はちょうどそれほど忙しくない時期だから。ま、どうせ、君の心配など杞憂に過ぎなかったと大笑いすることになるだけだろうが。」

この私の言葉を聞いて、E君も心底ほっとしたようだった。それが如実に表情に現われ、おまけにそれまでまるで直立不動のようにならなくなった肩がすとんと落ちたかと思うとその声までがそれまでと違って、かつて一緒にいたときのきびきびした快活なものに変わっていた。

「本当に助かります。……なんだか僕はいつも北河さんに助けってもらってばかりのようですね。一緒に来てくれるようお願いするのは二度目ですものね」

そうだった。あの時もけっきょく私は彼の願いを断り切れずにあの洞窟に入ったのだ。

……洞窟の内側に続く階段は九十九折りでまるで奈落の底まで続いているようだった。黴と埃、熱帯特有の腐臭とも過熟した果実のものともつかない臭いがあたりに充満している。隊員達が被る安全帽ヘルメットにつけた前照灯の光が幾筋も階段脇に広がる暗闇にのびる。落石の音、誰かの舌打ちの音、隊員たちの規則的ともいえる単調な靴音に混じって、風なのか、妙に甲高い音が時たま耳朶をふるわせる。

「セアカオオアシコウモリの声ですよ。」

生物に詳しい部員の声が、暗闇に陽気に響く。だめだ、ここでそんな声を出しては、この場所は神聖にして犯すべからざる場所……

「……で、いつにしましょう」

はっと我に返ると、E君は肩から提げた鞆を体の前に回して、小ぶりの自在手帳を取り出し出している。私は、なんとか頭をはっきりさ

せると予定を思い出した。

「・・・明日は午前中に抜けられない会議がある。午後からだ遅いかな」

「そうですね、開帳は午前一回と午後二回とありますから。僕もちょうど明日の朝は少し用事があつて」

けつきよく翌日の午後に新橋駅の西口交番前で落ち合うことにした。いなせ

私も手帳に書き留めようと背広に手をやったとき、鱧背いなせな印半纏をきた若い衆がぶつかってきたと思うと、先を急いでいるのか「きいつけやがれ！」といいざま、雑踏の中に消えていった。

それがきつかけで、なんだかずいぶんと久しぶりに顔を上げて周囲を見る余裕ができた。それにしても銀座は平日の昼間だというのに行き交う人々は歩道から溢れんばかりである。看板の前に立つ私たちはかなり通行の邪魔になっていたようだが、それまでそんなことにはまるで気がつかなかつた。

「ますます人が増えてきますね。あつちに行きましょう」
手を取られるようにして歩き出した。

二、三歩行く前に我知らずのうちに振り返っていたものの、あの宣伝板は人波のむこうに隠れてもう見えなかつた。

雑踏から逃れて一息つくくと、E君は喫茶店にでも寄つて休んでいかないかと誘つてくれたが、私はとてもそんな気にはなれなかつた。暑さと人いきれに加えて、あの記憶がまるで当時そのままのように体力を奪い、早く家に帰つて休むことだけを考へていた。そんなわけでもまだ何か言いたそうな彼を相手に、もう一度待ち合わせ場所と時間を手早く確認すると、最近環状運転を始めたばかりの山手線に乗るために有楽町駅に向かつて歩き出した。(山手線の環状運転は一九二五年のことである。)

と、歩き出して一町(一町はおよそ一〇〇米)も行かないうちに、ようよう、金床雲の端が頭上に差し渡り、急に日の光が遮られて、いい案配に涼しげになつたと思つたのもつかの間、さあつと冷たい雨の振り出しが

まるで如雨露じょいうろで庭に打ち水をするかのように降り出した。都会の雑踏に水蒸気が陽炎となつてたちのぼり、それこそ本当に打ち水をしたかのようにだつたが、すぐさま、頭上を雷が走つたかと思うと、それこそ、如雨露どころか、たらいをぶちまけたかのような、肌痛いほどの勢いの雨となり、あつという間に人は散り、瞬く間にほんの一間先も見通せないほどの吹き降りになつてしまつた。銀座から有楽町へは地下道が延びていたが、突然の雨を避けようという人混みに、それこそ雨が降る前以上の人混みをかき分けなければならなかつた。

二、

翌日も抜けるような青空で、朝から水銀柱はぐんぐん上がり、冷房機のない部屋での会議はまったく気が乗らないもので、他の出席者が惚けたように扇子ばかり勢いよく動かす姿を見るにつけ、自分もあした間の抜けた顔をしているのかと会議の内容そつちのけで、ますますやる気が削がれることだつた。

新橋駅についた頃には体中汗まみれで、まあ、まわりで歩いている勤め人や繁華街へめかしこんで出かけていくご婦人方もよく見れば服のあちこちが汗で変色しているのに気がついて、少しは気持ちも落ち着いた。

暑い上に新橋駅はちょうど高層化工事の真最中で、もう数日あとだつたら西口交番というのもなくなくなつていくところだつた。(これは意図的である。実際の高層化はかなり後のことである。)高層化にあわせて冷房機の設置も行なうと書かれた工事看板がよけいに暑さを募らせるようなものなどどぶつぶつ言いながら、私は約束の時間より五分ほど前に交番に着いたのだが、E君はすでに来ていた。

その恰好を見て驚いた。

まるであのときの、あの探険の時の恰好そのものだつただけから。すでに通勤時間帯はすぎていたが、それでもさすがに平日の昼とあつて大勢の勤め人たちが脇目もふらずに足早に行きすぎるのだが、

彼のそばにさしかかるや十人とも必ず思わず顔を上げて目を瞠って行く。さすがに足を止める人影はなかったが、きつと、職場でのちよつとした話題になつてゐるに違いない。

その彼の出で立ちとはといえば、防虫薬をしみこませた厚手の砂漠色の半洋袴スポンと長靴下に登山靴。さすがに上着は着ていなくて、砂色の半袖綿上衣シャツだけがそれも首元まできちつと釦を留め、胸衣ペンに

何本もの洋筆を差している。さらに頭の上には見るからに使い込んでいるのが知れる汚れの付いたままの保護帽、肩に見える革帯から背中には探険部標準品の砂色の背囊も背負つてゐるようだし、脇には小ぶりの肩掛け雑囊もしつかりと下げている。

そんな恰好でゐるにもかかわらず彼自身はまったく周囲に無頓着で、片手にもつた紙片を一心不乱に見入つていた。

「やあ、お待たせしましたか」

しつかりと見入る様子に声をかけるのに少し躊躇したものの、気をつけて明るい声でそう呼びかけた。

意外なことに、すぐに彼は振り返つた。手の中の紙片をきちんとたたんで胸衣ペンにしまつと、挨拶もそこそこに、切符を差し出してくる。

「僕がお願いしたんですから」そういつて私の分の切符を押しつけてくる。私はちつともそんなことは気にしていなかったのだが、それで彼の気がすむなら、とありがたく頂戴することにした。

「まだ時間がありますが、お食事はまだですか？ そりゃいい、僕もまだなんで、弁当でも買つていきましょ」

工事のおかげで迷路並みに入り組んでゐる通路を抜けて、国鉄の改札口にむかつた。

東海道本線の乗降場で駅弁と最近はやりの袋式のお茶を買つた。急須をもつと細身にしたような透明な樹脂製の入れ物に、絹で作つたらしい小袋に一人前の茶の入つたのが入れられており、蓋が湯飲み代わりになる案配で、前掛けをした小僧が七輪にかけてある鉄瓶

からちんちんいつてゐる湯を注いでくれる。細い針金の持ち手が指に食い込んで持ちにくかつたが、それなりに便利ではある。

まだ発車まで時間もあり、四人掛けの箱席に荷物もおいて二人で占有できた。座席二つを占領した彼の大荷物と違つて私は会議資料の入つたいつもの通勤鞆だけだつたが。

「世の中はどんどん便利になつていきますねえ。電化されてからの東海道線に乗るのは初めてですよ。環状線にはもうお乗りになりましたか」透明樹脂の土瓶とも急須ともつかない茶入れを見ながら彼が言つた。熱湯を入れてゐるのでなかなか冷めない。

「ああ。本当に日進月歩の時代だね。そういえば君に会つた日は新型の大型飛空艇が銀座の上を飛んでいたよ、太平洋横断路線用の。」

「ああ、たしか『まほろば』とかいふ名前でしたね。・・・そういえばあの『にらいかない』はあの後・・・」

「うあつち！ ああ、無事に欧羅巴ヨーロッパは花の都巴里パリに数日の遅れでついたそうだよ。艦長は老練だから、煩わしい将校達がいなくなつてかえつて順調だつたつていうもつぱらの噂だよ」

小さなこれも樹脂製の蓋を裏返した湯飲みでは、電車が揺れると指に茶がかかつて思わず声を上げてしまうほどで、けつきよく、冷めるまで窓際の折りたたみ小机においておくしかなかった。

私の言葉にさもありませんというように頷きながら、E君は窓外を流れる景色に遠くを見るように視線を移す。

街並みがとぎれることなく帝都から神奈川へと移つていく。モース博士が見つけた貝塚もあつという間に通り過ぎる。

E君が窓を開けた。東海道線は民間鉄道や環状線に遅れてつい最近電化されたばかりだったが、汽車と違つて窓の開け閉めを気にする必要もなく、微かに潮の香りを乗せてゐるような涼風が心地よい品川から川崎あたりは羽田飛行場の民間利用も本格化したおかげか加工関係の工場や世界を相手にした流通会社の倉庫などがここ数年めざましく増えている。そうしたまるで箱のような大きくて近代的な建物のあいまいまにのぞく昔ながらの瓦屋根や土塀、雑木林に

囲まれた神社などがふつと心を和ませる。

あまりの心地よさに眠気を催しそうになって慌てて鞆から書類を出した。目の前の連れも先ほどから窓枠に肘をついてなかば眠っているようだ。

気持ちよく揺られること半時ばかりたった頃、

「そうだ、弁当食べましょう」E君が急に上体を起こしたかと思うと、私の顔を見据えて、まるで宣言でもするかのように厳かに言う。それまでなかば半覚醒状態だった私もつられて思わず背筋を伸ばしていた。

弁当は東京湾産の浅蜷を謳っている深川井風の丼をかたどった容器に盛られている。たいして繁盛している風だったが、いつの間にか消えてしまったのが大変残念である。

そうして弁当をあらかた食べ終えた頃、もうすぐ横浜というあたりで、彼が脇に置いていた雑囊から分厚い原稿の束を出して見せた。

「それは……」私は思わず口走った。

「ええ、……あの探険の記録ですよ。私の役目だった……」

まるで大事な宝でもあるかのように、そっとその原稿の表紙に手を滑らせている。

「まだできあがっていないんですが、せっかくですから見てもらおうかと思って持ってきたんですけど……でも、いいです。これは端っから私の仕事なんですから。あなたにご迷惑をかけるわけにはいきません」また唐突にその原稿の束を雑囊にしまい込んでしまふ。

「迷惑なんかじゃあないが……」しかし、内心ほっとしていたのを認めないわけにはいかない。今、目の前にあった記録はけして世に出ることがないのは、あのとにもう決まっていたのだから。

二人とも押し黙ったまま、ただ、視線を合わせないようにして幾ばくかの時が過ぎた。

次は横浜、という車内放送がその沈黙を破った。私は、思わず言わずもがなのことを訊ねてしまった。

「そうだ、奥さんはお元気かね。確か高等女学校の理科の……」
寂しげなほえみが返ってきた。内心の思いを隠すための仮面。

「体をこわしてしまって……。今は寝たり起きたりなんです。いや、私は気の病だっついていてるんですけど」

「そ、そりゃ、大変だね。彼女ならきつといい先生になると思ったんだが、残念だよ。しかし、養生すればまた……」

そうではない、あの場に居合わせた者はけして元に戻るなどあり得ないのだ。特にあの泉の水に触れた者は……

「ありがとうございます……。そうだ、今朝の会議は探険の後援者会合だったんじゃないですか。時期的に今頃でしょう」

「さすがだね。そうそう、今年の探険はなかなか奇抜なんだ。ちょうどここに新聞向けの資料がある。聞けばきっと君も興味がわくと思うよ」

横浜をすぎてひなびた風景が続く間、私たちは本心とはまったく別にその年の探険の話で時間を消化していった。

大船で電車を降り、さらに乗り合いで半時間ほどいくと、目的の遊戯園「相模夢之王国」に到着した。(この遊園地の名は仮名である。)

おおきな弓形門と女性が好みそうな人形風に戯画化された動物や空想上の生物たちの見上げるばかりの像が迎える。

今ではこうした大きな興行は木戸銭といわずに入園料ということに感心しながら、入口のもぎり嬢に目的の興行場所を聞くと目の前の広場の向こうにある天幕を張り巡らせた大きな差し掛け小屋がそれだった。もとは極彩色に塗り分けられていたらしい天幕の模様も今はすっかり色落ちして、かえって寂を感じさせている。見ようによつてはただだらぶれているということでもあるのだが。

平日にもかかわらず、家族連れがかなり歩いている。突然、鐘太鼓や甲高い笛の音がにぎやかに響き渡った。見れば券売所の裏手から派手な衣装をまとった宣伝隊の行列が繰り出して来る。笛太鼓にあわせて踊る道化師が数人、客の間を踊るような足取りでちらしを配っている。押しつけられるようにして手渡されたちらしは、あの銀座で見た大判宣伝の縮小版（実際にはあちらが拡大版なのだろう）だった。

E君もちらしを受け取っていた。が、たいして眼もとめずに、適

当に折つて雑囊にしまい込んでしまふ。彼は電車を降りてからほとんど口を開かなくなつていた。乗り合いの停留所を確かめたり入園切符を買うときも最小限の言葉しか口にせず、この時も、あの生真面目そうな表情で、ただ、目の前の天幕を見つめているばかりだつた。

小屋の入口はまだ幔幕で閉じられ、脇の一段高くなつた客寄せ台も無人だつた。腕時計を見ると開演まで少しばかり時間があつたので、入口の幕前でぼつねんと立っているE君に声をかけて広場の木陰におかれていた木製の長椅子に腰を下ろした。彼も黙つたまま私の横に腰を下ろしたものの、視線はまだ入口の幕のあたりを見ているようだつた。

ちらしは確かに銀座で見たのと同じだつた。地模様代わりの文句を読んでみる。

“世に盗人の種はつきまじ、と言つたのは大盗石川五右衛門であつたが、盗人は時代とともに小粒になり、開化このかた大盗賊と呼ばれるほどのものは現われもせず、やれ押し込みだ金庫破りだと下らぬ騒ぎばかりである。

しかし、天地開闢以来、か弱き娘にまつわる悲話・哀歌は決して絶ゆることなく色あせもせず、その時代時代に応じて世間の涙を頂戴してきたものにして、人種民族を問わず相通するものがある。

ここに本邦どころか古今東西世界にはじめてご紹介するのは、げに悲しき定めを負いし娘である。云々”

三、

昼間の火花が鳴つた。見上げる青空に白い煙の花が咲く。

どこから現われたのか広場はけっこうな人で埋まつていた。いつの間にか、差し掛け小屋の客寄せ台には絹帽子シルクハットに燕尾服という恰好の男が現われて群衆を前にまるで無頓着に集音機の調整をしている。見れば、かなりの太鼓腹で鼻の頭は真っ赤というまるで絵に描いたような興行師である。

機械の調整が終わつたらしく、聴衆を一度り見回した後、絹帽子をとつて深々と一礼するや前説を叫びだした。絹帽子の下は見事な禿頭で、夏の日差しに目映いばかりに光つていた。

興行師の口調そのままに聴衆はどよめき笑い顔を伏せ、佳境に入つては手巾で目元を押さえる女性も多かつた。一段と声調が高くなつたかと思つと、今一度絹帽子を右手にとると体ごとひねるようにしてその絹帽子で入口を指し示した。

と同時に入口の幔幕がさつと両側に開き、なかから進み出た案内人が柱の脇に立つて両手で小屋の中へ聴衆を差し招いた。ここではまだ『お代は見てのお帰り』という良き伝統が残つていゝらしく、特に銭函を下げていゝ風でもなかつた。

赤白の縦縞に拳ほどもある釦をつけた大きすぎる衣装。ぼんぼりをつけた紫のとんがり帽。真っ白に塗つた顔に卓球の球ほどもある赤い鼻。頬の渦巻きと眼のまわりの隈取り。典型的な道化師の恰好をした案内人。興行師の口上とはまるで場違いな姿だつたが、幔幕の奥、見せ物小屋の暗闇のなかに入つていく見物人たちにとつてはかえつて興をそそるものらしく、案内人の默劇よろしき無言の所作や意味ありげな仕草に、少女はいうにおよばず妙齡のご婦人方までもが嬌声をあげている。

私たちが小屋に入つたのはかなり後の方だつた。あの看板に見えるE君の熱心さからすれば、人混みをかき分けて先に行つてもおかしくないのだが、私たちは決して急ぐことなく、ただ、たんたんと人の流れに沿つて入口を抜け、なにやら口上のようなものをつぶやく案内人の横をすり抜けた。

今思えば、あれは口上などではなかつたのだが。

真夏の日差しから急に屋内に入ったせいで、心地よかつたものの、場内の薄暗さに目が慣れるまでにしばらくかかつた。いつとき、まるで何も見えない闇の中をただ大勢の人間達のたてる衣擦れや靴音、せわしない息の音などとともに進んでいった。通路を仕切る柵に向かう脛を思い切りぶつけてしまったせいで、しばらくの間私はびつこを引きながらそれでも人の波に遅れまいと先を急いだ。

暗闇が・・・

けつきよくその先に進むことにしたのは、高木部長は当然として四年生を中心にした主要な探検部員と、M嬢、R子、S嬢の女性陣、秋森大佐と彼の部下数人、徳川教授と漆黒の肌をした苦力の一団、E君と彼に懇願された私だった。

広間にぼつかりと口を開いた暗闇に携帯電灯の光芒が走る。

「さあ、足下に注意して。行きますよ」高木部長が先頭になって暗闇に踏み込んでいった。

暗闇が・・・

前方がぼんやりと明るくなり、通路用の幔幕が終わると、地面が剥き出しの平土間になっていた。差し掛け小屋の外見から思っていたのよりずっと狭く、すでに人いきれでなんだか蒸していた。

平土間を半分ほど埋めている見物人の頭越しの奥、五、六尺ほどの高さに舞台があつたが、これも幔幕で閉じられている。

天井からぶら下げられた数個の裸電球。薄暗い場内に見物人たちの潜めた声がるで潮騒のようにさわさわと満ち、時に嬌声や興奮した笑い声がせまい空間にわき起こる。電球が揺れると、まるで土間全体が揺れているかのような気になる。いくつかの電球がいつべんにそれも不規則に揺れると、まるで土間全体が影達の舞踏会場かのようにだった。

音もなく舞台の幕が上がった。客たちの間に囁きが広がる。あちこちで舞台を指さしたり、顔を寄せて妙に頷きあつたりしている。

舞台の端は天井まで続く鉄格子が全面にわたってはめ込まれていた。ほの暗い照明に金属色が照り映えて、全体的にくすんでいるこの小屋の中でそれだけが真新しいもののようにだった。

その鉄格子の向こうはまだ闇につつまれて見えなかった。闇のなかに浮かび上がる真新しい鉄格子。

Dejavu、デジャビユ、既視感。

私はこれと同じ光景を見たことがあった。

・・・手提硝灯ランタンを足下に置くと徳川教授は、苦力たちに流暢な口調で叫んだ。いつせいに彼らは背負っていた軽合金棒の束を下ろし、器用な手つきで組み立て始める。硝灯の薄明かりにせわしく動く彼らの影が洞窟の壁面にまるで踊っているかのように浮かび上がる。

「そ、それは」

「そう、さんざん練習させたからな・・・こうして組み上がると」
りっぱな檻ができあがっていた。

「教授、まさか」

「そう、そのまさかだよ。あれは絶対にただの獣なんかじゃない。

あのダーウイン老のくだらない説をくつがえすだけの・・・」

徳川教授はまるで独白のように喋りながらそのできあがったばかりの檻を一回りすると、手近の苦力を杖で打った。と、苦力達は檻についている棒を持って持ち上げた。闇の中、鉄格子の影が異様に歪んで壁面に浮かび上がった。

ちようどその時、先に進んでいたE君の声が木霊のように闇の中に響いてきた。

「徳川教授、北河さん、おい、こつちですよー。もつと奥に続いています。北河さん・・・」

北河さん、大丈夫ですか？」

はつと我に返ると、E君が私の顔をのぞき込むようにしている。汗がどつと噴き出した。

「大丈夫ですか」

「いや、あの檻を・・・」

舞台の上はまだ何の変化もなかった。

と、突然舞台上に照明がつき、機械音がしだしたと思うと中央に奈落から何かがせり出してきた。

ちようど一人一人が入れるほどの檻。その中にあれが・・・

そうだ、あれは間違いなく・・・

・・・銃声は徳川教授だった。

通路を少し行った先に血まみれになった教授と、一見、岩と見間違ふようなそれが倒れていた。拳銃を握りしめたままの教授は腹を食い破られて内蔵があらかた飛び出しているほどひどい有様だった。一方の怪物の方もいくつもの銃創から赤い血を流してことごとき死んでいた。

まるで岩のような灰色のざらついた肌。ごうごつと節くれだった関節。それこそまるで岩の固まりのような頭に真ん丸の瞼のない眼と割れ目のような口。胸部が貧弱な割に下腹部が異様にふくれ、手足の指が我々の倍ほどはあろうかというほど長かった。ただ、背丈は我々の腰ほどしかなかった。

節くれ立った手首やまるで節くれだった竹のような頸に例の錆だらけ汚れだらけの装飾品を巻いている。よく見れば手の込んだ繊細な浮き彫りやいくつもの宝玉がはめ込まれているのがわかった。

「これが教授の探していた『証明』か」

「確かにこの、この・・・が世に出たら大騒ぎになるのは確かだ」
「もうここまでだ。これだけ犠牲が出ては探険を中止せざるを得ない。」部長が教授の亡骸を見下ろしながら言った。

「ちよつと待って！」教授を取り囲む一団から離れて立っていたM嬢が一声放った。脇にいつものようにR子が控えている。

「ここまで来てすぐごと逃げるつもり？」

「逃げるなんて・・・ああ、君のいうとおり逃げることになるんだらう。この探険は失敗だ。尻尾を巻いて逃げ出すんだ」高木部長が静かに言う。

「冗談じゃないわ。」

確かに死人が六人、いえ現地人を入れれば十人以上ね。これだけ人が死んでいれば確かに失敗よ、誰が見てもね。決めつけるように吐き捨てる。その言葉に部長の顔がゆがんだ。しかし、彼女はすくなく口調を変えて続ける。

「でもいい？ みんな何のためにここまで来たの？ あの伝説に一片の真実があると思えばこそ、ここにこうしているんでしょ？」

M嬢が周囲の天井や壁を仰ぎ見るように大きく顔を動かして、大

仰に両手を振り上げてみせる。

「みんな教授の見取り図を見たでしょ？ 伝説のとおりだったじゃないの。もうすぐそこ、その先に最後の部屋があるのよ。『久遠の泉』は、・・・墓所のための楔ぎの場に違いないわ。これまででわかるように、まだ誰も手を付けていないことは確かなのよ。」

さすがに彼女もその泉が伝説のままに不老長寿の泉なのだと思ふことはしなかった。が、その口調には彼女の思いがありありと現れていた。

M嬢は一団を回り込んで通路の先まで歩くと、くるりと振り返った。

「いったい何が見つかると思う？ 眼に浮かぶわ、これまで欧羅巴の後塵を拝してきた私たちが彼らに・・・」歌うように夢見るように彼女の口調が踊る。

「・・・そう、そうすれば、誰も失敗だなんて言わないわ。貴い犠牲なのよ、この人達は」

「Mさん、それは少し言い過ぎじゃございません？」

S嬢が口元を手巾で押さえながら言う。彼女が今この洞窟にいるのはM嬢に対抗するためだけであることはこの時にはもう誰の目にもはつきりしていた。

「たとえば、こんな化け物がいるようでは、私たちだけではとても・・・、そう、秋森様、大佐のお若い方がたに同行していただくわけには参りませんか？ そうすれば、私たちも安心して進めますことよ。ねえ、何とかありません？」怪物からすこしく身を離して、傍らにいた秋森大佐に半身を向けて、見上げるような流し目で言う。

「そうですねえ・・・わかりました、Sさんがそうまでおっしゃるなら、民間人保護要請規程を適用して」大佐も思いきり考え抜いたような姿勢で、S嬢に向き直って同意する。

「まあ、うれしい！ 秋森様はやはりとってもお話のわかる方ですね」

大佐が脇の副官に増援を呼ぶように指示すると、肩を落としたような副官はそれでも律儀に敬礼して、駆け足で通路を戻っていった。

「さ、Sお嬢さまのおかげで安全になるんですから、先に進みましよう」幫間のような部員の声音に一同は各人の荷物を取りに戻る。

完全に主導権を奪われたM嬢は、ただひとり声もなく立ちつくしていた。一団がその場を離れたころ後ろに控えるように寄り添っていたR子が彼女の耳元に何か囁いたが、それを片手を振ってさえぎると、自分も足早に歩み去った。と、R子の傍らにE君が寄り添うとその手をそつと握るのが見えた。

「北河君、教授の・・・教授の亡骸とそいつを何とか防水面布に包んでおいてくれないかな。できれば、苦力にでも先に持ち出してもらっておいてくれたまえ」部長の声が反響する。私はあわてて苦力たちのほうに走った・・・

弾金仕掛けでもあるのか、せり上がってきた檻がバタバタと展開した。息を呑む声が土間に広がる。

が、それはうづくまっただま動かない。まるで岩がおいてあるだけのようだ。しかし、見るべきものさえわかっただけならば、交差した腕に顔を押しつけて頭頂部をこちらに向けて蹲っていることがわかる。

「北河さん、あれはどう見ても・・・」

E君が私の腕をきつく握りながら言う。

私は声もなかった。なぜならそれはまさしく私たちがあそこで見たものに他ならなかったから。

最初は水をうったように静まり返っていた客たちの間から不満げな声が上がりました。

と、岩の肩辺りが動いたかと思うと、一閃、鉄格子の天井も間近というあたりに飛びつくと、この世のものとは思えない声で場内を切り裂いた。鉄格子を軋ませて体全体をゆすり、天を向くように声をあげつつづける。

不満の声をあげていた客たちは一転して悲鳴をあげたが、大方の客はいっそう身を乗り出すかのように舞台との間を詰め始めた。

獣でも人間でもけしてだせない雄叫びがくりかえしくりかえし場

内に反響した。

そうだ、この声が・・・

絹を引き裂くような悲鳴が扉の向こうから響いた。そして、それにかぶさるようになんともいえない叫びが深くくぐもるように反響した。苦力や若年の探険部員たちと思わずその手を止めて、腰を伸ばした、その時。

突然、銃声とともに扉が大音響を立てて開け放たれた。

見ればR子を肩に抱えるようにしたE君が入口から姿を現した。続いて探険部員や軍人、苦力たちが我先に飛び出してくる。その恐怖に引きつった顔は私など眼中になく、先を争うようにして通路を走り抜けてゆく。一心不乱に走る秋森大佐と彼を追い抜こうかというS嬢の姿もその中であつた。私は腰から拳銃を抜くと、最後尾になつたE君に走り寄った。

「E君！ いったい何があつたんだ？ 部長は？ M嬢もいなくなつたぞ！」 気を失っているらしいR子を抱えなおして、E君も走り出した。

「部長は死んだよ。M嬢も死ん、いや、行方不明、行方不明だ！」 あの吼え声でしたかと思うと、怪物達が姿を見せた。

怪物達はまるで先を争うかのように、その長く強い指先で壁といわず天井といわずぶら下がって、我々の周囲を走っている。無数の眼がほのぐらい洞窟に白く浮かび上がる。さらに、彼らが身につけている装飾品がたてる乾いた金属音が四方の壁に反響する。

時折前方で銃声が響くたびにひとときわ高い叫び声が反響したが、それだけのことで、われわれを取り囲む怪物たちにまったく何の変化もありはしなかった。

「北河さん、先に行ってください。僕らは大丈夫です」横を行く私にE君が苦しげな口調で言う。

「大丈夫なもんか！ あっ！ 君、怪我してるじゃないか！ そら、僕がかわるう」反抗されるかと思いきや、素直にR子を私の背中に預けてくる。そうして、自分はシャツの裾を噛み切ると、傷口に巻き付けた。

気がつく、いつのまにか私たち三人のまわりから怪物たちが姿を消していた。どうやら、怪物たちにさえ先を越されてしまったらしかった。

静けさが辺りを包み、三人の荒い息と不規則な足音だけがやけに大きく響いた。

「いったいどうしたんだ？ 何があつたんだね」

「あとで、後ですべて説明します。それが僕の役目ですから・・・」消え入りそうな声でそれだけ言って、後は押し黙ったまま、ただ、歩いていった。

どのくらい歩いたのか、ようやく広間にたどり着いた。

中央の篝火が、無残に引き裂かれ、食いちぎられて散乱する無数の死体を照らし出している。

目を覆う惨状に、しばらくの間、ただ、立ち尽くしていたように思う。

そのうち、怪我人があげるうめき声や床をはいずる物音にわれに返った。きれいな場所を見つけるとまだ気を失ったままのR子を下ろした。見たところ外傷はなさそうで、ただ、探検服の両腕から肩口にかけて胸あたりまでがしとどに濡れていた。

散らばる資材の中から奇跡的に医療品の箱を見つけ出せたので、E君と手分けして声を頼りに怪我人の間を回って素人にできるだけのことをした。

そうして現実から逃避して忙しくしていた時、大音響とともに壁の一角が崩れ、眩い陽光が・・・

まるですべての思いを断ち切るかのごとく、背後から目映い光線が差し染め、逆に舞台一面は暗転して何も見えなくなつた。鉄格子に電気の火花が散り、取り付いていたものも撥ね飛ばすように暗闇の中に消えた。

拡声器からのものらしいひび割れて聞き取りにくい興行師の声が興行の終わりを天井から告げた。振り返ると、幔幕が大きく開け放たれ、腰高の柵と回転式の木戸が逆光に浮かび上がっていた。

陽光がまぶしかった。私は思わず片手を上げて日光から目を守つ

たが、E君はまるで体ごと地面の下に沈み込もうとでもするかのようにならぬかと俯いている。思わず私が肩に手をかけると、ようやく顔を上げたが、その白さといえば、顔中の血管がすべて青く浮き出ているかと思うほどだった。

まだ興奮冷めやらぬ客や木戸銭ほどではなかったと不平をこぼす一団の中、私とE君は無言のまま、いくばくかの小銭を事務員風の男に渡して表へ出た。

人の流れのままに、差し掛け小屋の前の広場に戻ったとき、E君は無言でただ私の顔を見つめるばかりだった。私も言うべき言葉が見つからず、そのものといたげな瞳を見返すばかりだったが、しかし、とうとう、思わず、

「けつきよく、君は・・・」と口をついて出た。

「それは、あとで、後でちゃんと説明しますから」

そう言って、つと眼をそらして軽く頭を下げると、そのままごみの中に歩み去つた。

真夏の日差しに、また汗が体中から噴出すのが感じられた。

四、

数日後、E君から衣装箱いっぱい資料が届いた。その中には、あの時、車中で見せてくれた原稿と探検中の記録や収集した資料がすべてきちんと分類されて収められており、そして、その一番上に、読後焼却して欲しい旨を記した便箋一枚だけのごく簡単な手紙が入った封筒が乗せられていた。

E君の願ひ通り、箱いっぱい資料は届いた日の午後私の手元にあつた他の資料とともに庭で焼いてしまった。

その後ほどなくしてあの興行が児童福祉法違反容疑で官権の捜索を受けたものの警邏隊が踏み込んだ時にはすでに興行師もあれも姿を消していたことを新聞で知った。

そして、E君の奥方が盛夏を待たずして亡くなられ、その後を追うように彼自身も命を絶つたことを知つたのはもう 蝸こづかいの鳴く初秋

のことであつた。

私たちの探検の後、あの洞窟 地底遺跡が発見されたという報を知らない。今でもしばしばあのときのことを夢に見て、夜中に目覚めることがある。特に、虫の音が煩いほどの熱帯夜に。その夢の中で私は、ぐっしょり濡れたR嬢を背中に担ぎ、暗闇の中、懸命に走っていた。私の汗と彼女からしたたるミスが混じり合い、いつしか私自身も全身濡れそぼつたようになっていく。真つ暗闇の中、横にEくんの顔がぼうつと浮かび上がっている。その顔もしとどに濡れ、苦痛にゆがんでいる。その顔が変貌していく。人間らしさを失い、まるで、まるで・・・

ああ、今にしてわかる。あれは確かに伝説のとおりのお泉だったのだ。ただ、不老長寿となるためにはこのあるがままの人間の姿であることはできないのだ。

あの暗闇が、私を呼んでいる。あそこには今もM嬢がいる。きつと彼女のことだ、あの玉座について怪物達を睥睨しているに違いない。

今、吼え猿の声がしなかったか？ 手足の妙に長い影が、ほら、窓を歩き過ぎなかったか？

あの洞窟は今も私の心の中に黒い黒い影を落としている。

了

していた欧羅巴派遣書記官の船中日誌の抜粋、そして氏のこの作品だけという簡略なものであつた。

ここに描かれているのは前述の聖杜大学探検の翌年、探検部部長になりたてのころの回想と思われる。

「E君」とは前年まで探検部書記だった江上真之介のこと。出版社に残されていた原稿を見ると最初はそのまま「江上君のこと」としていたようだ。(なおこの直筆原稿は記念館の開館にあわせて出版社から記念館に寄贈されたが、昭和四五年に盗難にあい、以後所在不明となっている。写真のみ現存)

本編に登場する人物であるが、まず女性は、R子は田島玲子。M嬢の付き人であつた。付き人とはいっても興津郡の旧家の出である。この探検から帰国後、その秋のうちに江上氏と結婚した。M嬢とS嬢については、この二人が誰なのか特定することは公には今も許可されていない。

実名で登場する秋森大佐や高木部長はすでに物故されているが、発表当時に事前に何らかの相談があつたのかどうか、当時の編集担当者も不明な今となつては知るよしもない。

その他、年代を紛らわすための細工や探検内容が推測できないような書きぶりなど、一見単純な追想隨筆風でありながら、かなりの苦心の跡が今では明らかである。

追記：

この百年誌の第三章「聖杜大学明治三五年度東阿弗利加探検」は、その資料の多くを江上氏が残した探検部年報によつていっている。

この探検は当時の部長高木平助の手になる二足歩行機や新型蒸気駆動掘削機などの新発明が採用され、本邦近代探検の嚆矢であるとするのが探検史家の定説である。本来であれば公式の報告書が上梓されるはずだが、その結末の異常性から文部省、軍当局を含めた非公開の秘密事後処理委員会において一切の公式報告を作成しないこととされたため、現在ではこの探検部年報が唯一の資料となつている。

ながらく公然の秘密とされていた同委員会の存在は公文書公開施行規則により先年ようやく議事録が公開されてその存在が証明された。この議事録は証言者数や保管資料も膨大にのぼり、かなりの部分が未公開または非

追補

作品解題：

「E * * 君のこと」は氏としては珍しい身辺雑記風隨筆であり、月刊「辺境奇譚」昭和一五年八月号《現代探検特集》に掲載されたもの。この特集号は明治改革以降の名の通つた探検の概略を掲載しているのだが、聖杜大学の東阿弗利加探検だけは参加者名簿の断片と隆城丸にたまたま同乗

公開処分であるにもかかわらず、現代探険史に貴重な貢献をするものと思われ、現在聖杜大学探険部を中心に鋭意解析中である。

しかし未だに当時の記録係であった江上氏の証言部分はすべて非公開放分である。その証言は随所で引用されていることから、この探険の根幹部分をなすものだということがわかるものの内容に触れている部分はそこもまた必ず非公開放となつてゐる。

江上氏は周囲からの度重なる要請や懇願にたいしても一度たりと探険の詳細はおろかこの委員会について口を開くことはなかつたことが周囲の証言から知られている。

(佐藤付記)

文末にあるとおり、探険資料の多くは北河氏の手で破棄されたらしい。

聖杜大学探険部では、さる屋敷の奥深くに江上氏の残した『衣装箱いっぱい』の資料が秘匿されているという噂がまことしやかに囁かれていたという。

北河鱒之介 年譜

本名・喜多川万寿夫？(一八八五？一九五七？) 本名、生没年とも諸説ある。

千葉県下総郡瀧波村生

聖杜大学社会学部社会学科卒 小説家・戯曲家

一八八七年の全国的な打ちこわしによる瀧波村役場の炎上とこれに伴う廃村により出生記録が失われている。このことが彼の作品の基調となつてゐるといふのが現在の定説である。

明治二五年(一九〇二) 両親と死別(事故と伝えられるが未詳)。

三五年(一九〇二) 聖杜大学夜間部入学。給付生として昼間は社会学部の給仕

を行なうが、探険部の顧問でもあつた勅使河原教授に気に入られて書生として師事したことから、その後の人生が決まつたといえる。同年秋に探険部入部。

三六年(一九〇三)

給仕兼機材管理掛として『聖杜大学東阿弗利加探険』に参加。同探険については、本書第三章を参照のこと。先鋒隊生存者を引率して帰船したことが高く評価され、翌年社

会学部特待生に。探険部部长に就任。

四三年(一九〇八)

同大学院卒業 数年間は阿弗利加経験を生かして外交補助官や商社の現地代理人として阿弗利加大陸を転々としたと云われるが、当時を語ることは終生なかつた。

大正 六年(一九一七)

月刊文芸誌『風狼』に「夜明けの晩に」発表。『風狼』新人賞、帝都文芸賞、文部省芸術新人育成基金優秀賞他を受賞。その後寡作ながらさまざまな分野の小説・戯曲を主に伝奇関係の雑誌に発表。

一四年(一九二五)

遠縁にあたる設楽樺を養子とする。翌年には望月昌彦を養子としたが、樺の家督相続確認書を公証役場に提出する。

昭和一九年(一九四四)

一月、欧羅巴戦役(通称第二次世界大戦)で在欧羅巴日本総領事館に勤務していた昌彦がゲリラ戦に巻き込まれて死亡。同年一二月免疫不全により樺が病死。度重なる不幸に、この後の一年間はいっさい世間との交渉を絶ち、わずかに自宅付近を散策する姿が見られるだけだつた。

三二年(一九五七)

七〇歳を越えていたにもかかわらず、誰が見ても五十代にしか見えなかつたという。写真嫌いが有名で、自宅を寄贈した際にも、氏の写真はいっさい残っていないなかつた。

同年 四月五日

品川区上大崎の自宅をそのまま聖杜大学に寄贈する手続きを行なう。蔵書の数およそ八万冊に及び、現在でも目録の作成は終わっていない。

翌六日

聖杜大学探険部部室において部員と懇談、未明に及ぶ。

翌朝、すでにその姿はなく、以来一切の消息が知られていない。

外務省渡航記録部の書類には六日に氏らしき人物がケニア船籍の貨物船に乗り込みミニスカトリック島に向け出国したと記されてゐるともいわれるが、外務省はこれを認めていない。

かつての聖杜大学探険部では四月六日に毎年行事を行ない、北河氏の偉功をしのぶのが習わしとなつていたという。今でもこの時期になると氏の墓前には花の絶えることがない。

写真説明

星杜大学東阿弗利加探検については、現地での写真類はまったくといっていいほど残っていない。ここに掲げた写真は清水写真館所蔵になるもので、探検途中に同行の写真師が東谷氏に宛てた手紙に同封されていたものらしい。手紙自体は現存していない。

